

# サイ・テック 知と技の発信

【362】

## 埼玉大学・理工学研究の現場

本研究室では、ありふれた元素から機能性材料を作製する研究を行っている。研究結果のアウトプットは、学会発表・特許・論文などがある。どこに、どういつやり方で発表するか、というところに研究者の個性が出る。本研究室は、博士前期課程(修士課程)の学生「本人に」「欧文で」執筆してもらったことを目指している。理学・工学の対象に地域性はない。そのため、得られた知見を世界に向け欧文で示す必要がある。

■「頭脳労働者」への願い  
学生本人に欧文で書いてもらうのは、「頭脳労働者」として大学

学院に至るまで、母語である日本語で教育を受けることができる。

## 欧文で論文提出の鍵 神島 謙二 准教授

古くは、漢文であつてもし点などを付けて日本語にしてきた。明治以降も、海外発祥の概念を日本語として訳してきた。訳しづらい場合もカタカナでそのまま用いるという柔軟な対応をしてきた。何でも日本語にして、取り込んでしまつのである。我々、日本人の知的活動の多くは日本語で行っているともみても良いだろう。

しかし、理学・工学で得られた知見は欧文、特に英語でアウトプットしなければならぬ。中学以来、英語を習っているにもかかわらず、それが使えないところの問題がある。昨今の英語教育改革の動機もここにあるのであろう。改革の方法が正しいかどうか、私は非専門家であり、語るべき立場がない。だが、本研究室では、少々異なる処方箋を用いている。

■処方箋  
英語に接する機会がないのが根

本的な問題である。週1〜2回の講義を受講するだけでは、習得できないのである。そのため、本研究室では毎朝、洋書を約1〜2ページずつ5回音読している。

1回目に分からない単語を抽出する。その後、教員が英英辞典で調べ、その原義との繋(つな)がりを説明する。2回目は文法を意識し、修飾関係を押さえる。何が主文の主語・動詞かをハッキリさせる。3回目はタイムトライアルでとにかく早く音読する。ネイティブの「普通」は早いのでそれと合わせる。

4回目は大声で音読する。大きく口を動かすことにより、誤魔化しが効かなくなる。5回目は区切って丁寧に一文ずつ音読する。内容確認のため一文ごとに教員が意訳する。

以上のように、毎日欠かさずに、教員・学生一緒に朝の音読を実施している。どちらかというと「教員自身の練習」に付き合ってもらっているという図式かもしれない。その結果、学生も英語に触れる機会ができ、欧文論文を書くことに少しは繋(つな)がっていると思う。

英語に関しても、それ以外に関しても、教員自身、一学習者になれない。今後も学生たちと練習を続け、精進していきたいと考えている。

◇  
かみしま・けんじ 1972年生まれ。99年3月東京大学大学院理学系研究科物理学専攻博士課程修了。博士(理学)。理化学研究所、エディンバラ大学(英国)、東京都立大学(現・首都大学東京)での博士研究員を経て、2003年埼玉大学工学部助手。12年より現職。専門は材料物性科学。主に鉄族遷移金属酸化物/金属間化合物の物性を研究している。

# 埼玉経済

企業、団体、商店街などの話題や情報をお寄せください  
TEL 048・795・9161 FAX 048・6653  
keizai@saitama-np.co.jp